漂泊の詩人・伊良子清白と木斛（もっこく）

鳥羽市小浜町で23年間を過ごした伊良子清白の命日である1月10日を木斛忌（もっこくき）と命名し、後世へ語り継ぎたい

鳥羽郷土史会　尾崎徹氏寄稿

※木斛（もっこく）：ツバキ科の常緑高木

伊良子清白が、小浜に村医として赴任してきたのは、大正11（1922）年9月12日のことでした。

その前年、伊良子清白は京都から三重県南牟婁郡（みなみむろ）一木村（現在の熊野市一木）の一木医館に校医も兼ねた村医として赴任していましたが、食糧事情の悪さと患者のあまりの少なさに困り果てており、別の土地への移転を考えなければならない状況に追い込まれていました。

そんな時に、伊良子清白は鳥羽町大里の桃隠谷（当時は志摩郡鳥羽町）の久富医師から志摩の加茂村（現在の鳥羽市加茂地区）での開業を誘われました。

急に加茂村の視察を思いたった伊良子清白は、大正11（1922）年7月23日の夕刻、熊野の大泊港から船に乗り、翌日の朝鳥羽に入りました。昭和34（1959）年に紀勢本線が開通するまで紀州から伊勢志摩への移動は船便が一般的でした。例えば、明治44（1911）年、大逆事件で罪を問われた大石誠之助らのいわゆる「新宮グループ」の人々は、東京へ護送されるのに当時すでに開通していた新宮から大阪を経由して東海道線の列車を使う経路ではなく、熊野灘を北上する海路をとり、その途中深夜に鳥羽港に入り、一夜鳥羽警察署に留置されています。

さて、鳥羽で久富医師と面談した清白は、加茂村以外にも小浜村が医師を探しているということを聞かされ、すぐに小浜在住の鳥羽町の助役を訪ねその場で紹介状を書いてもらい、小浜を訪ねました。そこには住居を兼ねた村医のための診療所があり、その診療所は、船溜りに面していて、二階からは答志島、神島を経て、伊良湖岬が見通せ、目の前には、万葉の昔、柿本人麻呂が詠った〝阿見の浦〟の豊かで穏やかな海が広がっていました。

その後、加茂村の診療所の予定地を訪ねた後、鳥羽に戻った清白は、鳥羽駅裏の日和山に登って改めて緑の島々とどこまでも青い海、白い帆を立ててゆったりと浮かぶ船、その上に溢れるように降り注ぐ陽光が織りなす、鳥羽の海の絶景を目にして、伊良子清白の心は決まりました。

大正11（1922）年9月12日、伊良子清白とその一家は三重県志摩郡小浜町643番地に小浜小学校の校医を兼ねる村医として着任しました。

その後、昭和20（1945）年7月8日、三重県度会郡七保村大字打見（現多気郡大紀町打見）に疎開し、翌昭和21（1946）年1月10日度会郡七保村櫃井原（ひついばら）で、急患の往診の途中、迎えの人の自転車の荷台に乗っていた清白は、脳溢血におそわれ急逝するまでの約23年を小浜の村医として過ごしました。

伊良子清白は明治39（1906）年、後に明治詩史の白眉と評価される「孔雀船」を発表しながら東京を離れ、後に〝漂泊の詩人〟と形容されるように、台湾など各地を転々とし、死亡説が流れるほど中央詩壇からは忘れられた存在になります。そんな清白が再評価されたのは、奇しくも小浜に赴任した丁度この年、大正11（1922）年の暮れのことでした。

小浜町の旧宅跡地に建てられた石柱

西條八十が講演会で、日夏耿之介が中央公論誌上で、それぞれほぼ同時に、明治の詩史における「孔雀船」の価値を激賞したのです。つまり、決して伊良子清白自身が望んだことでは無いにしろ、清白の〝文名〟が再び高まったのは小浜に着任すると同時のことでした。

昭和3（1928）年5月19日東京で開かれた伊良子清白・横瀬夜雨誕辰五十周年記念祝賀会に出席のため、実に20年ぶりに上京し、島崎藤村、北原白秋、堀口大學ら当時の詩檀のそうそうたるメンバーに賞賛と祝福を受けたことが報じられ、鳥羽の小浜でも「あの伊良子先生は偉い詩人やそうや」と広く知られるようになりました。

小浜で村医として暮らす伊良子清白のもとを北原白秋や西條八十など多くの詩人歌人が訪ねてきますが、最初に小浜を訪ねたのはかつての〝文庫〟の盟友河井酔茗（すいめい）でした。河井酔茗は、昭和4（1929）年7月23日に小浜の伊良子清白宅を訪ねました。清白は早速近所の漁師に頼んで船を仕立て、河井酔茗を鳥羽湾めぐりに案内しています。

この日伊良子清白は日記の末尾に「飛島では御村じまに上陸せり　浜ごうの花さかりなりき　なでしこや百合や昼がおや咲いていたり　水のきよらかなること地球上のことと思われず」と記し、その欄外には次のような美しい詩を書き留めました。

松のないしま飛島は
浜ごうの花はなざかり
百合やなでしこ、
ひるがほの花、
人のたおらぬ花がさく、
磯は貝がら、浮木もまじる、
岩には豆の枝ぶりおかし、
清いみぎわの潮の色は、
海の底まですき通る

伊良子清白は鳥取で生まれ宮川のほとりで不慮の病を得て亡くなりましたが、〝漂泊〟と形容されたその人生の大半を小浜という一漁村の村医として過ごし、そのかたわら、乞われて短歌同人誌「白鳥」選者を務め、この地方の歌人たちの指導的役割を長く勤めました。

医師であり中央にも高い評価を受ける高名な詩人でありながら、その視点は、高見から見下ろすというものではなく、地域の人として生活を共にし、また同じ文芸愛好者として、共感のこもった批評をするという、いわば「隣人」としての視点を崩さなかった人でした。

そんな、鳥羽・小浜の〝隣人〟伊良子清白の旧宅には、大きな木斛（もっこく）の木があり、この地方で庭木として使われることの多いこの常緑広葉樹には、初夏になると清廉で小さい白い花が咲き、さらに盛夏になるとささやかな清白宅の庭にともに植えられていた朝顔と昼顔のつるがこの木に絡まり、美しい花を咲かせていました。鳥羽小浜の〝隣人〟として23年の年月を過ごした漂泊の詩人・伊良子清白がこよなく愛したこの木にちなんで、その命日である1月10日を「木斛忌（もっこく）」としてしのぶ日としてはいかがでしょうか。

伊良子清白旧宅

昭和20年に戦火を逃れるため旧大宮町（現大紀町）打見に疎開するまでの約23年間をこの家で過ごしました。この家は諸般の事情により、個人の尽力により小浜町から三重県多気郡大台町に移築されましたが、平成21年に再び鳥羽の地（鳥羽一丁目9-9）へ移築され一般公開されています

伊良子清白

明治10年10月4日～昭和21年1月10日（1877－1946年）。詩人。本名暉造（てるぞう）。別号すずしろのや。鳥取県八頭郡八上（やかみ）村（現・河原町曳田（ひけた）に生まれた。2歳で母を失い、のちに医者の父にともなわれて三重県に転居。津中学をへて、明治32年京都府立医学校を卒業。出京して伝染病研究所、東京外語学校ドイツ語科に学び、日本赤十字病院に勤務。医学校在学中から河井酔茗（すいめい）と往来して「文庫」「青年文」に寄稿し、当時大阪で発行された「よしあし草」に執筆して関西における詩歌革新運動に参加。

河井酔茗、横瀬夜雨とともに文庫派の三羽烏と称された。また、京都時代からの友人与謝野鉄幹の「明星」初期の編集にも参画した。明治39年5月、多くの作品中からわずか18編を厳選した詩集『孔雀船』を出版。同時に東京を去って詩筆を折り、島根県浜田の病院に赴任後、さらに大分、台湾、京都などをへて、大正11年に鳥羽小浜で医院を開業した。

参考資料

伊良子清白全集　岩波書店
伊良子清白・月光抄・日光抄
平出隆著・新潮社
「漂泊と魂の純化」
伊良子序　講演録
鳥羽郷土史会